

TOSCA-3 (短縮版) 日本語版の検討

菊池 章夫

An examination of a Japanese Form of TOSCA-3

Akio KIKUCHI

An examination on the reliabilities and validities of a Japanese form of the Test of Self-Conscious Affect-3 (short form) (Tangney and Dearing, 2002) was done using by the responses of 123 university students. Cronbach's α -coefficients of this form were slightly low, especially in Detachment(D) and Externalization(E) scales. Although the score of Prosocial Behavior Scale (PSB: Kikuchi, 1998) highly related to those of Guilt(G) scale of TOSCA-3, and Empathic Concern(EC) and Perspective Taking(PT) scales of Interpersonal Reactivity Index (IRI: Davis, 1998), significant relationships were not found, as expected, between the score of PSB and those of Shame(S) scale in TOSCA-3 and Personal Distress(PD) scale in IRI.

問 題

近年、恥や罪責感、共感、プライド、個人的苦痛などの感情は自己意識的感情 self-conscious affect (あるいは emotion) と呼ばれることが多くなってきている (Tangney and Fischer, 1995)。これらの感情は、その程度の差はあれ、自己との関連で感じられるという特徴を持っている。The Test of Self-Conscious Affect: TOSCA (Tangney and Dearing, 2002) は、この中で恥 shame と罪責感 guilt とを測定する尺度としてよく知られている。この尺度の最終版である TOSCA-3 には、11の否定的シナリオと5つの肯定的シナリオとから構成された版と11の否定的シナリオだけから構成された短縮版とがある。前者についてはすでに水野 (1998) がその日本語版を作成しているが、信頼性や妥当性などについては報告がない。今回は後者の短縮版について日本語版を作成し、その信頼性や妥当性についても検討する。

TOSCA-3

(例) 友人と昼食をいっしょにする約束をしました。夕方5時に、その友人をすっぽかしたことに気づきました。

- a) 自分は「身勝手なことをした」と思う。
(1・2・3・4・5)
- b) 「友だちだもの、わかってくれるよ」と思う。
(1・2・3・4・5)
- c) 「できるだけ早く、友だちと和解しなくては」と思う。
(1・2・3・4・5)
- d) 「昼ご飯前に周りでごちゃごちゃ言う奴がいたからだ」と思う。
(1・2・3・4・5)

この(例)に見られるように、この尺度では具体的なシナリオを示して、「自分がもしこういう場面に出会ったとしたら、どう感じたり・行動したりするか」を5段階で(「1:そんなことはしない/そうは感じない」から「5:必ずそうする/そう感じる」まで)回答させるようになっている。この(例)では、a)

恥 (S)・b) 無関心 (detachment:D)・c) 罪責感 (G)・d) 責任逃れ (externalization:E) を測定する項目である。11のシナリオについてそれぞれ4つの回答を求めるので、この4つの感情や行動それぞれについて11から55までの得点が得られることになる。

恥と罪責感とは、いずれも自己意識的であるだけでなく、否定的な色彩を帯びていること・ある種の内的帰属を含んでいること・失敗や違背などの否定的出来事から生じることなど、共通する特徴を持つ感情である。しかし他方では、恥では自己全体についての否定的評価(自分がひどいことをやった)がされるのに、罪責感では自分のとった特定の行動についての同種の評価(自分がひどいことをやった)が問題であるといった違いがある。この点では、罪責感よりも恥のほうが苦痛で、痛切な感情といえる (Tangney and Dearing, 2002)。なお、ここでいう「無関心」とは自分の行動の及ぼす影響について関心が低いこと、「責任逃れ」とは自分の行動について他者などに責任を求め、外的な帰属をする傾向のことである。

TOSCA-3 (短縮版) の原版は筆者によって邦訳され、日本語版が作成された。今回は原版との異文化間比較などを目的としていないので、訳し戻し法などの検討は行なわなかった。この版の項目と採点盤は(付録)に付けた。この日本語版を大学生123名(男子33名・女子90名)に実施して検討の資料とした。

その他の尺度

TOSCA-3 (短縮版) の日本語版についてその妥当性を検討するために、次の2つの尺度を同じ大学生123名に実施して検討した。

- 1) 向社会的行動尺度・大学生版 (PSB: 菊池、1998)
- 2) 对人的反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index: IRI) の日本語版 (デイヴィス、1999)

1) は20項目から構成され、向社会的行動(「列に並んでいて、急ぐ人のために順番を譲る」「何か探している人には、こちらから声をかける」など)を、どの程度したことがあるかを5段階で回答させる尺度で、得点は20-100の間に分布可能である。この尺度の信頼性や妥当性はすでに検討され、報告されている(菊池、1998)。

2) は、想像性 (fantasy: FS)・共感的配慮 (empathic concern: EC)・視点取得 (perspective taking: PT)・個人

的苦痛 (personal distress: PD) の4尺度からなり、それぞれに7項目・全体で28項目から構成され、回答は0(まったく当てはまらない)から4(よく当てはまる)の5段階で求められる。得点はそれぞれ7-28の間に分布しうる。項目の例は次のようなものである。

- ・想像性 (FS): 「自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする」
- ・共感的配慮 (EC): 「自分より不幸な人々について、やさしさや配慮の感情を持つことが多い」
- ・役割取得 (PT): 「物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようと思う」
- ・個人的苦痛 (PD): 「緊急の事故などに会おうと、気になって、落ち着いておれない」

この尺度の信頼性や妥当性は明田 (1999) によって検討されている。明田は因子分析の結果によって一部の項目を除外した日本語版を構成しているが、今回は原版の項目全部をそのまま使い、筆者が作成した訳文 (デイヴィス、1999) を用いた。

TOSCA-3 (短縮版) の日本語版で測定される恥 (S) や IRI の個人的苦痛 (PD) は、向社会的行動尺度との間にプラスの関係を持たないと予想される。恥は自己についての痛切な感情であるために、むしろ攻撃的な行動と結びつきやすいことが報告されている (Tangney and Dearing, 2002)。この点で罪責感 (G) では、自己そのものというよりは自分のやった特定の行動が問題であることから、むしろ向社会的行動と結びつきやすいことが知られている (ホフマン、2001の5・7章を見よ)。また個人的苦痛では、逃げやすさ・逃げ難さなどの条件によって向社会的行動との結びつきが別のもとなることが指摘されている (Batson, 1991)。IRI ではこうした区別はされていないので、向社会的行動尺度とのプラスの関係は予想されない。これに対して、IRI で問題とされている共感の情動的側面である共感的配慮 (EC) とその認知的側面である視点取得 (PT) とは、TOSCA-3 (短縮版) の日本語版とプラスの関係を持つと考えられる。共感がこの種の行動の動機となることは繰り返し指摘されていることである (デイヴィス、1999の7章を見よ)。

結果と考察

信頼性など: 上の大学生123名の資料について、TOSCA-3 (短縮版) の日本語版の各尺度の総得点と11のシナリオ中の対応する項目への回答との間の相関係

Table1) 各尺度間の相関係数 (r)

	PSB	FS	EC	PT	PD	S	G	D
FS	.08							
EC	.31**	.15						
PT	.31**	.07	.15					
PD	.00	.01	.17*	-.05				
S	-.07	.06	.13	-.13	.44**			
G	.30**	.21*	.21*	.11	-.01	.25**		
D	-.07	.10	.07	.06	-.01	.00	.06	
E	-.18*	.09	-.01	-.21*	.21*	.27**	-.11	.32**

注) * $p < .05$ ** $p < .01$ (n=123)

Table2) 各尺度間の偏相関係数

	PSB	FS	EC	PT	PD	S	G	D
FS	.13 .06							
EC	.35** .29**	.13 .10						
PT	.28** .25**	.12 .08	.19* .15					
PD	.04 .03	-.03 .00	.12 .16	.01 -.02				
S	-.13	.00	.06	-.14	.44**			
G	.36**	.19*	.18*	.18*	-.15			
D	-.05 -.08	.09 .08	.06 .05	.07 .07	-.02 -.02		.05 -.02	
E	-.15 -.12	.06 .10	-.05 .00	-.17* -.18*	.10 .19*		-.21* .29**	.33** .32**

注) 上欄は恥 (S)、下欄は罪責感 (G) を統制した場合の偏相関係数。

* $p < .05$ ** $p < .01$ (n=123)

数 (I-T 相関) を計算した。得られた相関係数 (r) は、恥尺度 (S) で .242-.602 (平均 .462)、罪責感尺度 (G) で .329-.560 (.422)、無関心尺度 (D) で .063-.530 (.376)、責任逃れ尺度 (E) で .179-.543 (.408) であった。また、同じ資料について得られた α 係数は、恥尺度 (S) で .70、罪責感尺度 (G) で .57、無関心尺度 (D) で .52、責任逃れ尺度 (E) で .55 であった。

この結果は、それぞれのシナリオでの感情や行動の中に全体得点との相関が低いものが含まれていることを示している。そうした傾向は特に無関心尺度 (D) と責任逃れ尺度 (E) で強いといえる。このことは、こうした感情や行動がシナリオの示す状況によってかなり左右されることからきていると考えられる。ここで得られた α 係数が、恥尺度 (S) 以外の尺度で十分とはいえないのも、このことと関連したことである。

こうした場合にとることのできる方略には2つがある。その1つは、I-T 相関係数の低かった項目 (感情や行動) の含まれているシナリオ全体を除いてしまうやり方である。しかしこのやり方では、もともと11しかないシナリオの数がさらに減ることになり、適当ではない。2つめの方法は、シナリオは残してこの相関係数の低かった項目だけを除くか、回答は求めても採点の際に除外するやり方である。今後この尺度を使っていくためには、この2番目の方略をとることを検討したいと考えている。しかし今回は、信頼性などの点である程度の問題のある11シナリオ・44項目 (感情や

行動) をそのまま使って検討を続けることとした。

他の尺度との関係など: Table1 に示した向社会的行動尺度 (PSB) との関係では、罪責感尺度 (G) との間に有意のプラスの相関が得られているが、恥尺度 (S) ではこうした関係は見られない。また、向社会的行動尺度 (PSB) と対人的反応性指標 (IRI) との関係では、共感的配慮尺度 (EC) や視点取得尺度 (PT) との間に同じようなプラスの関係があるのに対して、個人的苦痛尺度 (PD) ではこうした関係は得られていない。この結果は上で予想したのと同じであって、罪責感や共感に向社会的行動の動機となる可能性があるが、恥や個人的苦痛ではそうではないことを示唆している。また、TOSCA-3 (短縮版) の日本語版と対人的反応指標 (IRI) との関係では、恥尺度 (S) と個人的苦痛尺度 (PT) との間に高いプラスの相関 (.44) が見られるほか、罪責感尺度 (G) との間では想像性 (FS)・共感的配慮 (EC) の両尺度と有意 ($p < .05$) の相関が認められた。恥は shame のほかに embarrassment (困惑) といった内容を含んだ感情であるが、このことはここでの相関にも示されている。さらに TOSCA-3 (短縮版) の各尺度間の内部相関では、恥 (S) と罪責感 (G)、責任逃れ (E) と恥 (S)・無関心 (D) の両尺度との間に有意 ($p < .01$) の相関があった。恥と罪責感とがごく近い感情であることや、恥が向社会的な行動とは結びつかないことが示されている。以上のような結果は、TOSCA-3 (短縮版) の

日本語版の妥当性を示す資料であるといえる。

ただし厳密に言えば、ここで用いた尺度の間には、例えば恥尺度 (S) と罪責感尺度 (G) との間のように、互いが独立ではない結果 (両尺度間の $r = .25, p < .01$) も見られる。このために、Table2 に見るような偏相関係数を計算して検討した。得られた結果は、上で見た妥当性などの検討と大筋で矛盾するものとはならなかった。またこの結論は、恥と罪責感以外の有意の関係 (例えば、恥と個人的苦痛の間の $r = .44, p < .01$) についての偏相関の資料を検討した結果でも同じであった。

こうして TOSCA-3 (短縮版) の日本語版は、その信頼性にいくらかの疑問は残すものの、一応の妥当性をもつ尺度であることが示されたことになる。もちろん、この種の感情は文化や社会の条件によって違ったものとなることが予想されるし、それが感じられる場面や状況もこうした条件の影響を大きく受けると考えられる。また、自己意識的感情そのものにどのような感情を含めるかについても文化や社会の違いは重要であると思われる。筆者ら (菊池・有光, 2003) はこうした点を考慮に入れて、自己意識的感情の生起する状況や場面を検討し、それを基にした新たな尺度の開発を始めたところである。

*このノートは、菊池 (2002) の発表に加筆したものである。

文献

- 明田芳久 1999 共感の枠組みと尺度 上智大学心理学年報 23 19-31.
- Batson, C.D. 1991 *Altruism Questions: Towards a Social Psychological Answer*. Erlbaum.
- デイヴィス, M. H. (菊池章夫訳) 1999 「共感の社会心理学」 川島書店
- ホフマン, M. L. (菊池章夫・二宮克美訳) 2001 「共感と道徳性の発達心理学-思いやりと正義とのかかわりで-」 川島書店
- 菊池章夫 1998 「また/思いやりを科学する」 川島書店
- 菊池章夫 2002 向社会的行動の動機についての一資料 日本性格心理学会11回大会発表論文集 30-31
- 菊池章夫・有光興記 2003 自己意識的感情尺度 (KA-JiKoKan) の開発 (未発表)
- 水野修次郎 1998 日本人米国留学生における原因帰属, 罪,

恥と学習適応との関係 カウンセリング研究 31巻3号 259-269.

Tangney, J.P. and Dearing, R.L. 2002 *Shame and Guilt*. The Guilford Press.

Tangney, J.P. and Fischer, K.W. (eds.) 1995 *Self-Conscious Emotions: The Psychology of Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. The Guilford Press.

(付 録)

・ TOSCA-3 (短縮版) 日本語版

この質問紙には、毎日の生活で出会うようないくつかの出来事が書いてあって、その場合に、私たちがどのような反応をするかも述べてあります。

それぞれの出来事を読んで、自分だったらどうするかを考えてみましょう。そして、それぞれの反応を自分がどのくらいやりそうかを例のように○で示してください。(回答用紙は別になっています。) こうした場合に私たちは、同じ出来事についても、同時にいくつかの感じをもったり・いくつかの行動をしたりしますし、場合によって、同じ出来事にも別々の反応をします。ですから、それぞれの出来事についての反応全部に○を記入してください。1-5の数字は次のことを示しています。

1. そんなことはしない・そう感じない
2. もしかするとそうするかもしれない・そう感じるかもしれない
3. そうする・そう感じる/そうしない・そう感じないが半々である
4. おそらくそうする・そう感じる
5. 必ずそうする・そう感じる

[例]

土曜日の朝早くに目がさめると、外は寒く、雨が降っています。

- a) 友だちに電話して、天気の悪いことを知らせる。 (①・2・3・4・5)
- b) 新聞を読む時間にする。 (1・2・3・4・⑤)
- c) 雨が降っているのがっかりする。(1・2・③・4・5)
- d) どうしてこんなに早く目がさめたのかと思う。 (1・2・3・④・5)

この場合のように○をつけますと、a)では「土曜日の早朝に友だちを起こすこと」はしない b)では「朝に新聞を読む」のはいつものことである c)では「がっかりする」かもしれないし・そうでないかもしれない、半分半分である d)では「どうしてこんなに…」とおそらく感じる のを示したことになります。

a)からd)までの項目について、それが自分に起きたらと考えて、全部に記入してください。

- (1) 友人と昼食をいっしょにする約束をしました。夕方5時

に、その友人をすっぴかしたことに気づきました。

- a) 自分は「身勝手なことをした」と思う。(1・2・3・4・5) a
 b) 「友だちだもの、わかってくれるよ」と思う。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 「できるだけ早く、友だちと和解しなくては」と思う。
 (1・2・3・4・5) c
 d) 「昼ご飯前に周りでごちゃごちゃ言う奴がいたからだ」と
 思う。(1・2・3・4・5) d

(2) みんなといっしょに使う仕事の用具を壊してしまい、そ
 のことをみんなに隠しています。

- a) 「イライラする。直すか・別のものを入手しなくては」と
 思う。(1・2・3・4・5) a
 b) 「この仕事やめちゃおうか」と思う。(1・2・3・4・5) b
 c) 「最近はずぐ壊れる安物が多い」と思う。
 (1・2・3・4・5) c
 d) 「これは偶然起きたことだ」と思う。(1・2・3・4・5) d

(3) 自分たちである計画を立てる仕事をしていて、それが出来
 上がるのを期待していましたが、結局はうまくいきま
 せませんでした。

- a) 自分は無能力だと感じる。(1・2・3・4・5) a
 b) 「今日は時間が足りなかった」と思う。(1・2・3・4・5) b
 c) 「計画をうまく立てられなかったので叱られても仕方がない」と
 感じる。(1・2・3・4・5) c
 d) 「終わったことは終わったこと」と考える。
 (1・2・3・4・5) d

(4) 仕事でミスをしたのですが、それはいっしょに仕事をした
 相手のせいだと分かります。

- a) 「相手は自分の協力者ではなかったんだ」と考える。
 (1・2・3・4・5) a
 b) 「人生で公平じゃないんだ」と考える。(1・2・3・4・5) b
 c) 何も言わないが、その相手を避ける。(1・2・3・4・5) c
 d) みじめに感じ、ミスを正そうとがんばる。
 (1・2・3・4・5) d

(5) ボール遊びをしていて、自分の投げたボールが友だちの
 顔に当たってしまいました。

- a) 「ボールをちゃんと投げられないなんて、自分は無能力だ」と
 感じる。(1・2・3・4・5) a
 b) 「友だちはボールをとる練習をもっとすべきだ」と考える。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 「単なる事故だ」と考える。(1・2・3・4・5) c
 d) 友だちに謝って、相手の気持ちが落ち着くようにする。
 (1・2・3・4・5) d

(6) ドライブをしていて、小さな動物をはねてしまいました。

- a) 「動物は道路にいちいけけない」と考える。
 (1・2・3・4・5) a
 b) 「ひどいことだ」と思う。(1・2・3・4・5) b
 c) 「つまらん事故だよ」と感じる。(1・2・3・4・5) c

- d) 十分注意していなかったので悪かったと感じる。
 (1・2・3・4・5) d

(7) テストを受けた部屋から「とてもうまくいった」と思っ
 て出てきました。それなのに、成績は悪かったのです。

- a) 「たかがテストじゃないか」と考える。(1・2・3・4・5) a
 b) 「先生は私のこと、好きじゃないんだ」と思う。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 「もっときちんと勉強すべきだった」と思う。
 (1・2・3・4・5) c
 d) 「バカなことを考えた」と感じる。(1・2・3・4・5) d

(8) 友達たちといっしょにいて、そこにいない友人のことを
 バカにして笑いあいました。

- a) 「冗談だよ、害の無い」と考える。(1・2・3・4・5) a
 b) 自分を「つまらないことをする人間だ」と感じる。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 「あの友人はあそこにいる、文句を言うべきだった」と思
 う。(1・2・3・4・5) c
 d) その友人に謝り、その人のよい点についてみんなに話す。
 (1・2・3・4・5) d

(9) ある重要な仕事のプロジェクトで、大きなミスをしまし
 た。仲間はあなたを頼りにしていましたし、上役からは
 批判されました。

- a) 「こちらにどういうことを期待しているかを、上役ははっ
 きり言うべきだった」と思う。(1・2・3・4・5) a
 b) どこかへ隠れてしまいたいくらいに感じる。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 「問題をはっきり認識して、よい仕事をすべきだった」と
 考える。(1・2・3・4・5) c
 d) 「完全な人間なんていないさ」と思う。(1・2・3・4・5) d

(10) 友だちが休暇をとる間、イヌの世話を引き受けていまし
 たが、そのイヌが逃げてしまいました。

- a) 自分は無責任で無能力だと感じる。(1・2・3・4・5) a
 b) 「友だちはイヌの世話をきちんとしていなかったに違いな
 い。そうでなければ逃げやしない」と考える。
 (1・2・3・4・5) b
 c) 今度はもっと注意すると心に誓う。(1・2・3・4・5) c
 d) 「友人は新しい別のイヌを飼えるということだ」と考える。
 (1・2・3・4・5) d

(11) 同僚の新築祝いのパーティに参加していて、赤いワイン
 をクリーム色のじゅうたんにこぼしました。でも、誰も
 気づいていないようです。

- a) 「こういうパーティではこの種の事故は起きがちだ、と同
 僚は予想しているはずだ」と思う。(1・2・3・4・5) a
 b) パーティの後で、染みを洗って取るのを手伝うために残
 る。(1・2・3・4・5) b
 c) 「このパーティに出なければよかった」と思う。
 (1・2・3・4・5) c

d) 「新しい明るい色のじゅうたんなのに、同僚はどうして赤いワインなんか出したのだろう」と不思議に思う。

(1・2・3・4・5) d

TOSCA-3 (短縮版) 日本語版・採点盤

1a	2b	3a	4c	5a	6b
7d	8b	9b	10a	11c	S合計
1c	2a	3c	4d	5d	6d
7c	8d	9c	10c	11b	G合計
1b	2d	3d	4b	5c	6c
7a	8a	9d	10d	11a	D合計
1d	2c	3b	4a	5b	6a
7b	8c	9a	10b	11d	E合計